

審査の結果の要旨

氏名 坂木 晴世

本研究は、新生児集中治療室(Neonatal Intensive Care Unit; NICU)において問題となっている薬剤耐性菌であるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌(methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*; MRSA)に対する感染対策の確立に向けて、その感染および保菌のリスク因子を明らかにすることを目的とした疫学研究である。NICU および GCU (Growing Care Unit) 即ちハイリスク新生児室の入院患児を対象に前向き調査を実施し、統計学的解析によってリスク因子の特定を試み、下記の結果を得ている。

1. ハイリスク新生児室の入院患児における MRSA の感染および保菌のリスク因子は、帝王切開での出生、眼脂の存在、経管栄養カテーテルによる初乳の投与、臍カテーテル留置、低い看護師率、MRSA 保菌圧の高値であることが示された。
2. 帝王切開で出生した患児、眼脂のある患児は MRSA が定着しやすいハイリスク群として、密な観察による感染徴候の発見が必要であり、標準予防策や接触感染予防策の遵守が重要であることが示された。
3. 経管栄養カテーテルによる初乳の投与は、MRSA の感染および保菌のリスク因子であることが示され、初乳は出生後早期に経口的に与えることが望ましいことが示唆された。
4. 臍カテーテルの留置は、MRSA の感染および保菌のリスク因子であることから、臍カテーテル留置の適用は慎重に検討する必要があることが示され、カテーテル留置期間は可能な限り短くすべきであることが示唆された。
5. 看護師率の低下は MRSA 検出のリスクを高めることから、NICU および GCU における適正な人員数の確保が必要であることが示された。
6. 高い MRSA 保菌圧下におかれていた患児は MRSA 検出のリスクが高くなることが示された。MRSA 保菌圧を低減するためには、サーベイランスによるモニタリング、保菌患児の早期発見とコホーティングが有効であることが示唆された。

以上、本論文はハイリスク新生児室の入院患児における MRSA の感染および保菌に関連する可能性があると考えられた因子を解析した結果、帝王切開、眼脂、経管栄養カテーテルによる初乳の投与、臍カテーテル留置、看護師率、MRSA 保菌圧という 6 つのリスク因子を特定した。本研究は、未だ感染対策が確立していないハイリスク新生児室の MRSA 感染対策の確立に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。